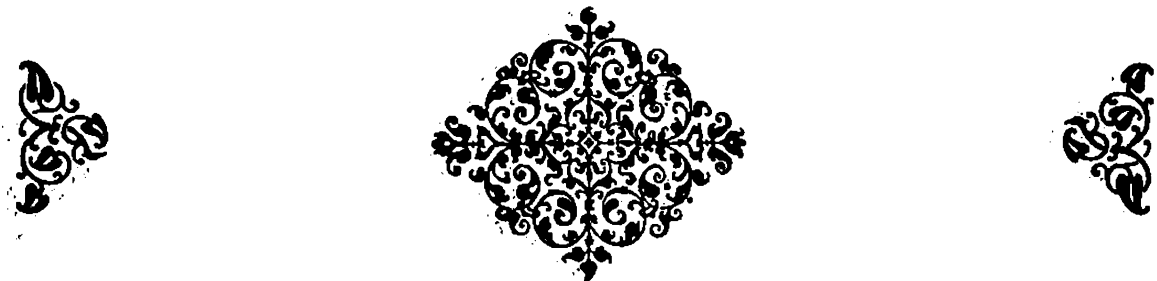


高山 博

日本を離れて早くも四年が過ぎ、Yale大学での生活も五年目の秋に入ってしまいました。その間、カルチャー・ショックは言うに及ばず、日本にいたときには殆ど考えなかった事柄について何度か考える機会がありましたので、その中からいくつか、この「クリオ」の場を借りて報告していきたいと思います。ただ、今回は、私自身が置かれている環境の紹介も兼ねて、アメリカの大学院で歴史学 PhDを取得するにあたって必要だとと思われる具体的な情報を提供することにします。留学に関する手引書は数多く出版されていますが、本当に必要な具体的な情報はなかなか手に入らず、四年前に米国留学を準備していた時に随分困ったことを覚えているからです。

さて、ひと口に留学と言っても、学位取得を目差すか目差さないかで留学の手続きも留学後の生活も大きく変わってきます。まず、学位取得を目指さない留学としては、選科生(special student)あるいは客員研究員(visiting fellow)になるという方法があります。この場合は、正規の学生とは完全に区別されていて学位を取得できませんが、講義の聴講はできますし、自由な生活を楽しむことができます。資金さえ確保されていればこの身分を得るのは容易ですから、短期の留学でしかも自分の研究のために図書館等を利用するのが主目的という人たちには最適かもしれません。しかし、アメリカの高等教育機関の長所を十分に享受したいと思う人には勧めることができません。そういう人はやはり何れかの学位を目差す正規の学生になるべきでしょう。

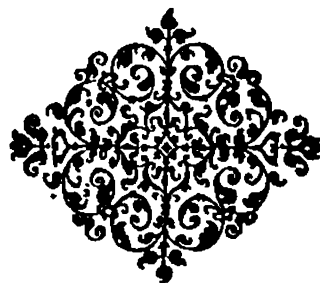
アメリカの大学が出す学位には学士、修士、博士がありますが、私たちの直接の対象となるのは修士、博士ということになります。最高の学位は博士ですが、博士論文を提出して取得する博士の場合は、専門分野を問わずすべて PhD (Philosophiae Doctor)と



呼ばれ、ロースクール、メディカルスクールの卒業学位である LLD (Legum Doctor), MD (Medicinae Doctor)とは区別されます。現在のアメリカではこの PhDが大学教授になるための最低条件となっていますから、PhDの学位がない教官は、助教授・教授に昇進できず、講師のままにとどまることが多いようです。

このように、PhDがアカデミアに入るための最低条件となっていますから、歴史学部を初めとして、PhDを有する学部の修士の学位は余り重要性を持たないこととなります。そのため大学院によっては修士課程を置かなかつたり、PhD取得が困難な学生の救済策としてこの学位を授与している所もあるようです。しかし、もちろん、修士課程を置く大学院も数多くあります。その場合、この修士課程は日本のように博士課程の前に置かれているのではなく、博士課程と平行して置かれていますので、PhD取得を希望する学生が在籍するわけではなく、博士課程に直接入学できなかった学生たちのために、あるいは実社会への準備期間として利用されているようです。そのため修士の学位を取得するのは、PhD取得に比して格段に容易になっています。たとえば、Yale大学大学院の場合、歴史学部の修士を取得するために必要とされるのは、六科目の授業（そのうち四科目以上は歴史学部の授業）を受けて、一つ以上の「優」、平均「良」以上の成績をとること、一つ以上の外国語試験に合格することとなっています。PhDを取得するのに平均八年近くかかるのに比べて、この修士(MA)を取得するには、通常一年、長くても二年しかかかりません。従って、短期留学でしかもアメリカの学生に混じってアメリカの大学院の長所を享受したいと思っている人たちには最適かも知れません。

以上、アメリカに留学する時の留学生の身分の違いと負担を簡単に説明してきましたが、将来アメリカの大学院で歴史学の PhDを取得することを考えている人たちのために、これからさき、四つの項目に分けて具体的な情報を提供したいと思います。(1)PhD取得のために何が必要とされるのか、(2)どういう授業が行なわれ、学生は何をしなければならないのか、(3)口述試験について、そして最後に、(4)留学の方法と準備について



いくつかのアドバイスを記したいと思います。

1. PhD取得のために要求されること

PhD論文提出資格を取得するためには、まず、二年間のコース・ワークを終了し、必要とされる外国語試験にすべて合格し、博士論文計画概要 (dissertation prospectus) を提出することが要求されます。この博士論文計画概要が受理されれば、口述試験を受けることができます。口述試験に合格した時点で実質的には博士論文提出資格を得たこととなりますが、公式にはその後の歴史学部教授委員会で承認されて博士論文提出資格者 (PhD candidate) となります。この後は博士論文を書き上げて、それが博士論文認定委員会で認められれば、PhDを授与されることとなります。

Yale大学の場合、二年間のコース・ワーク中に取得すべき科目の数は通常、最低で十二、最高で十四と定められています。そのうち少なくとも八科目は、歴史学部の科目の中から選択すること。また、二年間の四学期のうち三学期はリサーチ・セミナーを取ること (リサーチ・セミナーの場合、他の授業と違って、必ず学期末に一次史料を使った研究論文の提出を要求されます)。更に、二年目の科目のうち一つは歴史学部の教官の指導下で博士論文計画概要を準備する授業を含むことになっています。もし、一年目に一つも優を (優・良・可・不可の四段階評価) 取れなかった場合、あるいは、何れかの授業で問題が生じたり、研究者としての資質に欠けると判定された場合は、退学 (kick out) ということになります。

また、外国語に関しては、Yale大学では一年目に少なくとも一つ以上、その後口述試験までに、必要と考えられるすべての外国語の能力を証明しなければなりません。たとえば、古代史の場合、仏・独・ラテン・ギリシャ語、中世史では、仏・独・ラテン語、ヨーロッパ近・現代史は、仏・独語あるいはその他の言語という具合です。アメリカ史の場合は二つの外国語の能力が要求されていますが、この場合、日本語でもよく、また



統計・数学も第二外国語として認められています。この外国語の能力を証明する方法は三種類あります。まず、歴史学部が行なう外国語試験に合格すること。これが一番一般的な方法で、試験の内容は外国語から英語への翻訳だけです。第二の方法は、該当する外国語が特殊な言語であったり、当人の能力があまりにも明白である場合に、教官からその能力を証明する報告書を DGS (Director of Graduate Studies) あてに提出してもらおうというやり方です。第三の方法は私たち日本人にはあまり関係ありませんが、大学における仏・独・スペイン語の第三年目のクラスでの成績が B 以上 (A・B・C・D・Fail の五段階評価) であれば、試験を免除されます。

2. コース・ワーク (course work)

アメリカの大学、大学院に留学する最大の利点は、非常に効率的に組織された授業を受けることができるという点にあります。先に記しましたように、PhD 課程の学生は通常最初の二年間で十二科目取ることになっていますが、私自身は以下のような科目を取りました。

1984 Fall	Medieval to Modern Europe 1300-1500	H. Miskimin
	Great Peace: Japan 1600-1868	C. Totman
	Directed Readings	J. Boswell/ R. Stacey
1985 Spring	Law & Society in Medieval Europe	J. Boswell
	Sources in English Medieval History	R. Stacey
	Meiji Restoration	C. Totman
1985 Fall	Mohammad & the Legacy of Islam: 600-1260	A. Amanat
	Prospectus Tutorial	J. Boswell
	Topics in Medieval Christianity	E. McLaughlin



1986 Spring	The Decline of Rome	R. MacMullen
	Medieval England, 1066-1485	R. Stacey
1986 Fall	The Byzantine Empire, 330-1453	D. Geanakoplos

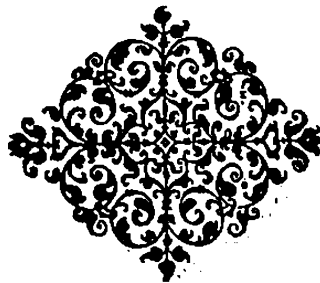
このうち、最後の『The Byzantine Empire, 330-1453』は聴講しただけですので私自身は二年間に十一科目しか取っていません。これは、1986年の春学期に D.Geanakoplos教授の個人指導をお願いしていたところ、途中でこの先生が健康を害したため、仕方なく東大の単位で残り一単位を埋めることにしたからです。

さて、私が実際に受けたこの科目の中から実例を挙げながら、アメリカの大学院の授業を説明していきましょう。普通の科目の場合、最初の授業に出席すると各時間ごとの予定と宿題を記した授業概要(syllabus)を受け取ることができます。たとえば、私が受けた J.Boswell教授の『Law and Society in Medieval Europe』のシラバスは次のように記されています。

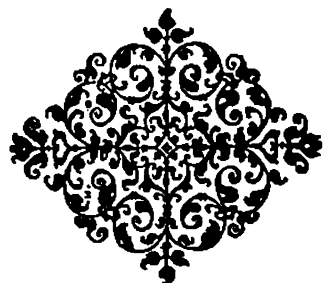
History 547b
Law and Society in Medieval Europe, John Boswell

Reading assignments. The date is the date on which the reading is due. Numbers in brackets refer to Select Bibliography of Published Law Codes, q.v. Additional assignments to individuals and xeroxes of shorter materials will be given out in class.

Jan. 22 Leviticus, Deuteronomy; Epistle to Romans; Councils of Elvira, Nicea.



- Jan. 29 Elder Seneca, *Controversiae* 1.4-5; *Collatio* [III.1]. Mishnah: Nashim, Sotah (trans. Danby, pp. 293-307); Nezikin, Abodah Zarah (437-45), Aboth (446-61).
- Feb. 5 Theodosian Code [III.3]: Books 3, 4, 5. (Titles:) 17-19, 12, 18-19, 14, 16. Sirmundian Constitutions.
- Feb. 12 MGH: Early Germanic laws [IV.2, IV.6]: Burgundian Code: Visigothic Code: (Book) 1. (Titles) 1-2; 2.1, 3, 4.1, 6.4-5, 7.5, 11.3, 12.
- Feb. 19 Kentish Laws, Laws of Ine and Alfred [IV.4]; Lombard Laws [IV.5]
- Feb. 26 [V.1-4] Councils of Orleans, Auxerre, Gerona, Toledo; McNeill, pp. 98-130, 179-215, 273-77; *Formulae*, wills, charters, capitularia (separate bibliography).
- Mar. 5 *Corpus Juris Civilis* [III.7]; *Leges Henrici Primi* [VIII.4]; *Glanvill* [VIII.6]; *Usatges of Barcelona* [VIII.5].
- Mar. 26 Burchard of Worms, *Corrector* [V.5]; "False decretals" [V.6]; Lateran Councils I, II, III [IV.6]; Gratian, *Decretum* [VI.2].
- Apr. 2 Grand Ordonnance [IX.1]; Bracton, Britton, Fleta [IX.2]; *Siete Partidas* [IX.3].
- Apr. 9 IV Lateran [VI.2]; *Corpus Juris Canonici* [VII.1]; Commentators [VII.2]; Fredol, *Liber de excommunicacione* [VI.4].
- Apr. 16 *Schwabenspiegel* [IX.4]; Earliest Norwegian Laws, *Gragas* [IX.5]; *Liber Augustalis* [IX.6].
- Apr. 21 Personal choice

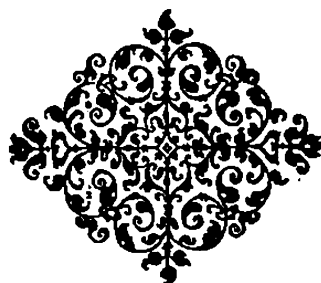


Research papers due Wed. May 1, 1985. No extensions, no excuses, no
clemency. Lasciate ogni speranza ...

このシラバスは、さらに十二ページの文献目録と三ページの図表を含んでいます。学生はこのシラバスに従って毎週宿題をやることになっていますが、大学院生の場合、一教科の宿題の量は一週あたりだいたい三百五十ページですので、三科目取っている普通の学生は毎週千ページ余りを読むことになります。もちろん、一次史料の場合は、ある程度ページ数は減りますし、教授によってかなり差が出てくることもあります。

授業は宿題を読んできたということを前提に進められます。従って、通常は、授業の最初に宿題となっていた本の概要を説明する、あるいは、その本に関する感想、質問を出すことが求められます。そしてそこで出てきた問題を議論するという形で授業は進んでいきます。アメリカでは授業への貢献度も成績に加味されますので、発言できない学生はその分減点されて、試験の成績もターム・ペーパーの成績も良かったのに、その授業の成績は悪かったということもありえます。

こうした宿題と授業参加以外に、学生は中間試験、期末試験の受験、あるいは、ターム・ペーパーと呼ばれる二十ページないし三十ページの論文の提出、もしくはその両方を要求されます。大学院生向けの授業の場合は、ターム・ペーパーの提出を要求するところが多いようですが、学部学生向けの授業を取った場合、たいてい、試験とターム・ペーパーの両方を課されます。私が受けた授業の中では、A.Amanat教授の『Muhammad & the Legacy of Islam: 600-1260』がこれにあたります。PhD課程の大学院生は、最初の二年間のうちに三つのリサーチ・セミナーを取るようになっていきますので、通常、学期末に二本のターム・ペーパー、一本のリサーチ・ペーパーを提出することになります。リサーチ・ペーパーは、ターム・ペーパーが二次文献を利用した論文であるのに対して、

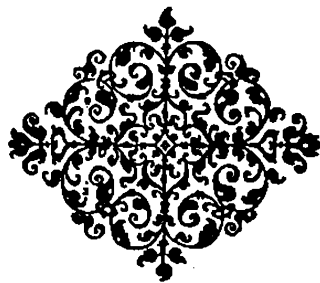


一次史料を用いた、より本格的な研究論文ということになっているようです。

特別の授業として、『Directed Readings』 というのがありますが、これは、教授と一対一もしくは一対二のセミナーです。この場合、学生の方は一人か二人ですので、宿題とされた本も相当深く読んでこないと殆ど授業が進まないことになります。私の場合、60才のおじいさんと一緒に、J. Boswell 教授と R. Stacey 助教授による『Europe 800-1300』という題目のセミナーを作ってもらいました。この授業のシラバスは、週毎に渡されましたが、その宿題の量は今から思い出しても胃が痛くなるような多さでした。最初の三回分だけ紹介しましょう。

Graduate Reading Course, Europe 800-1300
Week 1: Carolingians

- Bullough, D.A., "Europae Pater: Charlemagne and his Achievement in the Light of Recent Scholarship," EHR, Jan. 1970.
- Einhard, Life of Charlemagne (many editions, among them a Penguin translation).
- Ganshof, Francois-Louis, "Charlemagne et l'usage de l'ecrit en matiere administrative," Le Moyen Age, 4e serie, 1951.
- Ganshof, F-L, Frankish Institutions under Charlemagne, English translation by Bryce and Mary Lyon (1968).
- Fichtenau, Heinrich, The Carolingian Empire, or Louis Halphen, Charlemagne et l'Empire Carolingien (1947) are both good surveys.
- Dumas, Auguste, "La Parole et l'ecriture dans les capitularises Carolingiens," Melanges d'histoire du moyen age dedies a la memoire de Louis Halphen (1951), pp. 209-216.
- Loyn, H.R., and Percival, J., The Reign of Charlemagne (London 1975) is a useful collection of translated documents.
- Wallace-Hadrill, J.M., Early Germanic Kingship in England and on the Continent (1971), the chapters on Bede and on Charlemagne. If you have time, you may also wish to read the final chapter on Charles



the Bald.

Carolingian Chronicles, ed. and trans. by Bernard Walter Scholtz.

offers English translations of the Royal Frankish Annals and of Nithard's History of the Sons of Louis the Pious.

H. Braunfels, ed., Karl der Grosse: Lebenswerk und Nachleben, 3 vols.

(Dusseldorf, 1965) contains many articles of interest.

Laistner, M.L.H., Thought and Letters in Western Europe, 500-900

(1957), is interesting on the Carolingian Renaissance, as are the letters of Lupus of Ferrieres, which are translated into English and available on the shelves in the stacks of Sterling.

I do not expect you to be able to read all of this before Friday, so don't even try. Think about the importance of literacy to Charlemagne's success as a monarch, and about the relationship of the Carolingian Renaissance to Charlemagne's more practical concerns. Be prepared to take a position on these issues on Friday.

Graduate Reading Course, Europe 800-1300

Week 2: Germany 900-1003, Ottonians

Everything by Karl Leyser is of fundamental importance. His articles are best read in the following order:

"Henry I and the Beginning of the Saxon Empire," EHR 1968.

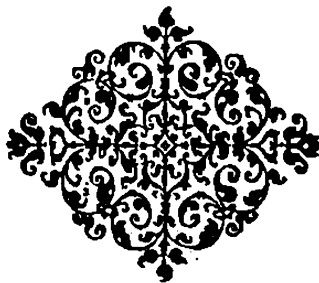
"The Battle at the Lech, 955," History 1965.

"Ottonian Government," EHR 1981.

"The German Aristocracy from the 9th to the 12th Centuries," Past and Present 1968; plus Leyser's reply to criticism in Past and Present 1970.

Rule and Conflict in an Early Medieval Society (1979):

"The Tenth Century in Byzantine-Western Relations," in Derek Baker,



ed., Relations between East and West in the Middle Ages (1973)

You should also make sure you need F.Dvornik, "The First Wave of the Drang nach Oxten," Cambridge Historical Journal (these days known as The Historical Journal), 1943.

and also, Robert Fossier, "Land, Castle, Money and Family in the Formation of the Seigneuries," in Medieval Settlement: Continuity and Change, ed. P.H. Sawyer (1976).

There are rather few studies of individual duchies under the Ottonians.

One good one, which extends well outside the 900-1250 time period also,

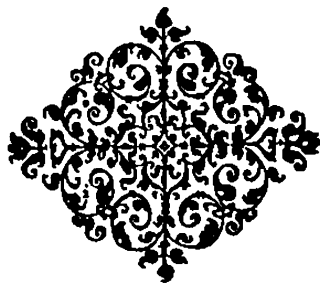
is Philippe Dollinger, L'Evolution des Classes Rurales en Baviere (1949).

Textbooks on this period: the most up-to-date one is Joseph Fleckenstein, Early Medieval Germany, translated B.S. Smith (1978). Geoffrey Barraclough, The Crucible of Europe is preferable to the same author's Origins of Modern Germany.

Graduate Reading Course, Europe 800-1300

Week 3: Late Carolingian/Early Ottonian Social and Cultural Sources

Familiarize yourself with the Formulae Merovingici et Karolini aevi, ed. Zeumer (1882-86) in the Monumenta Germaniae Historica (MGH)-- i.e., get an idea of the range of documents, their purpose, the matters they cover, who wrote them, etc. Do the same for one volume (of four) of Poetae Latini aevi Carolini, and the volume of poetry called Die Ottonenzeit, and for vol.8 of Epistolae Karolini aevi [all in MGH].



Then read R.S. Lopez, The Tenth Century: How Dark the Dark Ages? (1966) [and extremely short work] and be prepared to discuss the issues Lopez raises, his use of sources, and the evidence and nature of the sources you read in the MGH.

この「Directed Readings」のセミナーは異常に負担の大きいものでしたが、これと対照的だったのが「Tutorial Prospectus」です。これは、指導教官の指導のもとで博士論文計画概要 (dissertation prospectus) を作成する授業ですが、私の場合、一学期のうち二度しか授業がありませんでした。

さて、コース・ワークが終わって、外国語の試験にもすべて合格し、博士論文計画概要が受理されるといよいよ口述試験ということになります。

3. 口述試験 (orals)

Yale大学歴史学部では、PhD提出資格の最終審査は口述試験 (orals) で行なわれます。この試験は三つの領域、すなわち、専攻領域 (major field)、関連副専攻領域 (related minor field)、未関連副専攻領域 (unrelated minor field) で、三人以上の教官によって行なわれます。各領域の設定及びその試験範囲となる文献の種類は、教官と相談して決定します。私の口述試験の領域、担当教官は以下のように決められました。

Major Field:

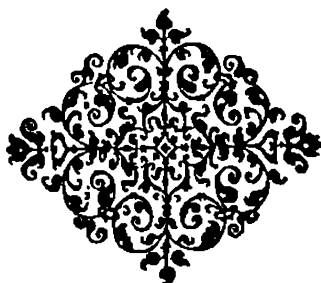
Medieval Sicily, 9c.-13c.

Prof. J. Boswell

Related Minor Field:

Administrative Institutions of Europe
in the Middle Ages, 11c.-13c.

Prof. R. Stacey



Unrelated Minor Field:

The Meiji Restoration

Prof. C. Totman

試験範囲となる文献の量・種類は、ある程度学生の希望も入りますが、基本的には担当教官次第ということになります。私の関連副専攻領域は、英・仏・独・北イタリア・シチリア・スペインの各行政制度を含んでいますので、実質的には通常よりかなり負担が重くなっていますが、一つの例として、その試験範囲となった文献目録を挙げておきたいと思います。

ADMINISTRATIVE INSTITUTIONS OF EUROPE IN THE HIGH MIDDLE AGES, 11c.-13c.

Bibliography for the oral: Related minor field
Professor R. Stacey, January 14, 1987

ENGLAND

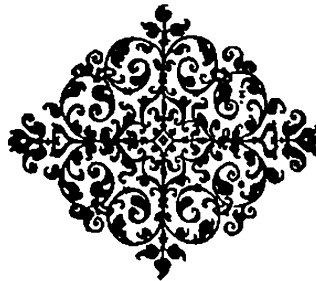
Campbell, James, "Observations on English Government from the Tenth to the Twelfth Century," TRHS, 25 (1975).

Chrimes, S.B., An Introduction to the Administrative History of Medieval England, 3rd ed., Oxford 1966.

Johnson, Charles, Dialogus de Scaccario: De Necessariis Observantiis Scaccarii Dialogus, qui vulgo dicitur Dialogus de Scaccario, London 1950.

Jolliffe, J.E.A., Angevin Kingship, New York 1955.

King, Edmund, "The Anarchy of King Stephen's Reign," TRHS, 1984.



Poole, R.L., The Exchequer in the Twelfth Century, Oxford 1912.

Richardson, H.G., & Sayles, G.E., The Governance of Medieval England from the Conquest to Magna Carta, Edinburgh 1963.

Warren, Wilfred Lewis, Henry II, Berkeley 1973.

-----, "The Myth of Norman Administrative Efficiency," TRHS, 1984.

Wolffe, B.P., The Royal Demesne in English History, London 1971.

FRANCE

Hallam, Elizabeth, Capetian France, 987-1328, London 1980.

Haskins, Charles H., Norman Institutions, Cambridge Mass. 1918.

Olivier-Martin, Francaise, Histoire du droit française des origines a la Revolution, 2e tirage, Paris 1975.

Strayer, Joseph R., The Administration of Normandy under Saint Louis, Cambridge Mass. 1932.

-----, "Viscounts and Vizuiers under Philip the Fair," Speculum, 38 (1963).

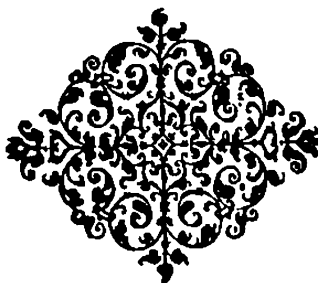
-----, The Reign of Philip the Fair, Princeton 1980.

GERMANY & NORTHERN ITALY

Barraclough, Geoffrey, The Origins of Modern Germany, New York 1946.

Hyde, John Kenneth, Society and Politics in Medieval Italy: the Evolution of the Civil Life, 1000-1350, London/ New York 1973.

Mitteis, Heinrich, Deutsche Rechtsgeschichte, ein Studienbuch, neubearbeitet von Heinz Lieberich, 15 ergänzte Auflage, Munich 1978.



Van Cleve, Thomas Curtis, The Emperor Frederick II of Hohenstaufen. Imutator Mundi, Oxford 1972.

Waley, D.P., The Italian City-Republics, London 1969.

SICILY

Chalandon, Ferdinand, Histoire de la domination normande en Italie et en Sicile, 2 vols., Paris 1907.

Jamison, Evelyn, "The Norman Administration of Apulia and Capua, Especially under Roger II and William I, 1127-1166," Papers of the British School at Rome, VI (1913).

-----, Admiral Eugenius of Sicily. His Life and Work, London 1957.

-----, "Judex Tarentinus. The Career of Judex Tarentinus magne curie magister iustitlarius and the Emergence of the Sicilian regalis magne curia under William I and the Regency of Margaret of Navarre, 1156-1172," Proceedings of the British Academy, LIII (1967).

Caravale, Mario, Il regno normanno di Sicilia, Milan/Varese 1966.

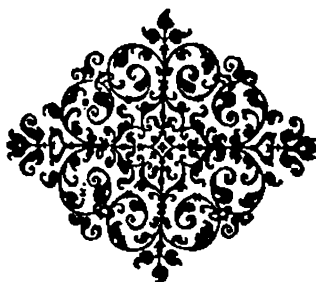
Mazzarese Fardella, Enrico, Aspetti dell'organizzazione amministrativa nello stato normanno e svevo, Milan 1966.

-----, "La struttura amministrativa del Regno Normanno," in Atti del Congresso Internazionale di Studi sulla Sicilia Normanna, Palermo 1974.

Takayama, Hiroshi, "The Financial and Administrative Organization of the Norman Kingdom of Sicily," Viator, XVI (1985).

SPAIN & GENERAL

Bisson, Thomas, Conservation of Coinage: Monetary exploitation and its



Restraint in France, Catalonia, and Aragon (c.A.D.1000-c.1225), Oxford/
New York 1979.

Kern, Fritz, Recht und Vervassung im Mittelalter, Basel 1952.

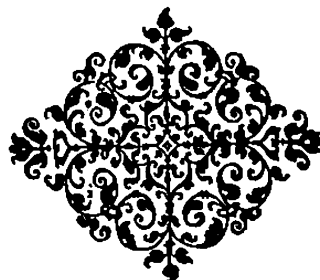
Morall, J.B., Political Thought in Medieval Times, London 1960.

Pirenne, Henri, Les villes du moyen age. Essai d'histoire economique et
sociale, Bruxelles 1927.

Strayer, Joseph, On the Medieval Origins of the Modern State, Princeton 1970.

実際の口述試験はこうした文献目録に基づいて行なわれますが、三つの領域を合わせて二時間程度ですので、余り細かい質問はされないようです。たとえば、この関連副専攻領域では、次のような問題が出されました。(1) イギリスのヘンリー二世期のエクステッカーの構造と機能について説明しなさい。また、実際にお金エクステッカーに払い込まれたとき、どういう手続きがなされますか。(2) Warrenの論文をどう思いますか。特に、シチリアのノルマン征服と比較した場合に、Warrenの説は説得力を持ちますか。(3) フランスのバイイ制度の成立の過程及びフィリップ四世期の地方行政制度を説明しなさい。(4) Van Cleve の本の新しい点は何ですか。これらの質問に答える過程で更に細かい付随的な質問が出されました。

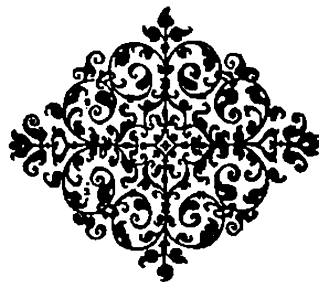
さて、口述試験に合格すれば、実質的に PhD論文提出資格を得たこととなりますが、公式には、その後の歴史学部教授の委員会で PhD論文提出資格者 (PhD candidate)として承認されます。この後は論文を提出するだけです。



4. 留学の準備と方法

アメリカ留学に関する概説的な案内書は数多く出版されていますので、一般的な事務上の手続きはそちらに譲ることとして、ここでは最低限知っておくべき事柄と、歴史学部限定した情報だけを提供します。まず、大学院の正規の学生になる場合、また、奨学金を申請する場合、たいてい要求されるのが TOEFL (Test of English as a Foreign Language) と GRE (Graduate Record Examinations) の成績ですのでこの受験勉強はできるだけ早く始めて下さい。この二つの試験以外で重要なことは、どうやって留学資金を確保するかという問題と志望大学の選択です。アメリカの有名私立大学の授業料は年間約 \$13,000、生活費が年間約 \$10,000 かかりますので、少なくとも、二年間分の学費・生活費として \$46,000 用意する必要があります。三年目からは、teaching assistant やその他のアルバイト、大学からの援助で何とかやっていけるケースが多いようです。とにかく、まず、最初の二年間の奨学金を見つけることがたいせつです。もし、日本国内でどうしても奨学金が見つからなかった場合は、最後の手段として、各大学が持つ奨学金を申請してみてください。私の場合は、最終的には Harvard Yenching Institute から四年間奨学金を受けることになりましたが、これが未定だった時に、Yale 大学が奨学金の交付を申し出てくれました。奨学金に関する情報も含めて、一度、早いうちに赤坂の日米教育委員会を訪ねることをお勧めします。

さて、志望校の選択をどうやって行なうかについては、次の表が一応の参考になります。左側は『Gourman Report』の1985年版による歴史学部の大学院別ランキング、左側は『New York Times』(1983年一月十七日)に掲載された同ランキング及びその内容別評価度(全米の平均が50)です。さらにその下の表は最近の歴史学部 PhD 取得者の大学院別就職状況です。

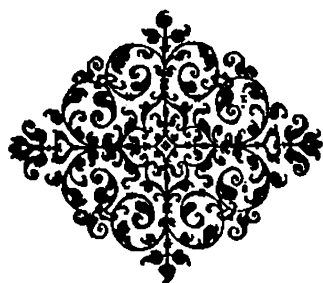


アメリカにおける歴史学部大学院別ランキング

Gourman Report, 1985		New York Times, Jan. 17, 1983				
	Score		Faculty quality	Effectiveness	Improvement	Familiarity
1. Yale	4.95	1. Yale	71	71	49	71
2. Berkeley	4.94	1. Berkeley	71	69	49	70
3. Princeton	4.93	3. Harvard	70	67	34	73
4. Harvard	4.92	4. Princeton	70	68	53	70
5. Michigan	4.91	5. Chicago	68	65	53	67
6. Stanford	4.90	5. Columbia	68	66	37	67
7. Columbia	4.89	5. Michigan	68	67	53	65
8. Chicago	4.88	8. Stanford	67	68	43	67
9. Johns Hopkins	4.87	9. Johns Hopkins	66	67	53	65
10. Wisconsin	4.86	10. Wisconsin	65	64	32	69
11. UCLA	4.84		64	62	53	65
12. Indiana	4.82		63	63	67	65
13. Cornell	4.81		62	63	41	64
14. Brown	4.79		62	63	66	58
15. Pennsylvania	4.77		63	62	55	63

アメリカの大学院における歴史学部卒業生（PhD取得者）の就職状況

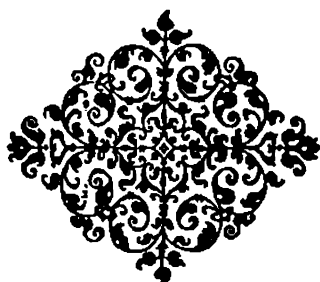
	卒業生総数 1975-80	現在の 大学教官数	大学への 就職率
1. Yale	109	77	70.6%
2. Berkeley	123	61	49.6%
3. Harvard	128	55	43.0%
4. Columbia	143	50	35.0%
5. Wisconsin	137	41	29.9%
6. Chicago	127	40	31.5%
7. UCLA	141	32	22.7%
8. Michigan	128	31	24.2%



9. Princeton	64	30	46.9%
10. Stanford	56	26	46.4%
11. Johns Hopkins	45	20	44.4%
12. Pennsylvania	47	18	38.3%
13. Texas	55	18	32.7%
14. Virginia	81	18	22.2%
15. Minnesota	67	17	25.4%
16. Duke	69	14	20.3%
17. Indiana	95	14	14.7%
18. Northwestern	45	13	28.9%
19. North Carolina	79	12	15.2%
20. Rutgers	57	12	21.1%
21. Ohio State	62	11	17.7%
22. UC S.Barbara	77	11	14.3%
23. Brown	29	10	34.5%
24. Illinois	45	10	22.2%
25. Boston U.	30	9	30.0%
26. Cornell	37	9	24.3%
27. NYU	92	9	9.8%
28. Pittsburgh	30	9	30.0%
29. Rochester	30	9	30.0%
30. Temple	24	9	37.5%

Source: AHA Guide to Departments in History, 1983-84.

これによってアメリカ国内における大学院歴史学部の大まかな評価がわかるのではないかと思います。もちろんアメリカの大学の場合は教授の異動が激しく、それにつれて大学に対する評価も大幅に変化する可能性があります。あてにしていた教授がいなくなっていたということのないように最新の情報を手に入れておく必要があります。ここに挙げられている大学のうち Yale, Princeton, Harvard は、他の大学に比べて入学するのは極端に難しくなっていますので注意してください。Yale大学歴史学部の PhDコースの場合、毎年 200-300名の出願者のうち 20-25名に入学許可を出していますが、そのうち



外国人は 1-3名です。Yale, Princeton, Harvard だけに出願して、すべてダメだったということがないように、ここに掲げてある大学院のそれぞれの特徴と教授陣を研究していくつかの大学院に出願するようにして下さい。

入学許可を手に入れるための助言としては、次の点を記しておきたいと思います。まず第一に自分が他の出願者に比べて抜きんでて優れている点あるいは違う点を示せなければなりません。日本の大学の成績は、余り役に立ちません。TOEFL, GREは足きりのためのものですから、点数はこんなにいいのにどうして落ちたのだろうと思わないように。一番役に立つと思われるものは、知名度のある欧米の雑誌に掲載された論文があるということです。その場合、志願者がすでに研究者として通用しているということを示し、大学の側がリスクを負わなくて済むからです。つぎに有用なのは大学内部の教授の推薦あるいはその教授がよく知っている研究者の推薦ということになるでしょう。いうまでもなくその大学と全く関係がなければそれだけ不利になります。従って、何とかして自分の才能を売り込まなくてはなりません。忘れてならないのは、アメリカの大学の場合、大学の側が自分達の欲しい学生を選ぶということです。日本のようにある選抜規準に基づいて上位者から入学許可を与えるというわけではありませんので誤解しないようにしてください。

さて、以上、アメリカの大学で PhDを取得するにあたって必要とされる事柄やそれに係わるいくつかの具体的な例を紹介してきましたが、これが少しでもアメリカ留学を考えている人の役に立てれば幸いです。次回の『A Letter from Yale, 2』では、私がアメリカ留学中に会った問題や考えるに至った事柄を紹介したいと思います。

